



TITLE:

ニホンザル研究林(I 研究所の概要)

AUTHOR(S):

研究林実行委員会

CITATION:

研究林実行委員会. ニホンザル研究林(I 研究所の概要). 霊長類研究所年報 1983, 12: 27-28

ISSUE DATE:

1983-01-19

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/163062>

RIGHT:

3) ニホンザルの成長に伴う眼内視所見の推移
後藤俊二

幼児期の人工哺育を主な対象として、単色光撮影法等による眼底像及び前眼部透光体の屈折率の変化についての継続観察を行っている。

4) ニホンザル四肢奇形の原因探究

後藤俊二

血液検査を主とした臨床病理学的検討を共同研究の一環として進めている。今年度は新たに幸島群が調査対象に加えられた。

1981年度(昭56)末飼育頭数調べ

種 名	頭 数
コ モ ン ツ パ イ	9
ワ オ キ ツ ネ ザ ル	3
ス ロ ー ロ リ ス	2
オ オ ギ ャ ラ ゴ	5
ワ タ ボ ウ シ タ マ リ ン	12
シ ル バ ー マ ー モ セ ッ ト	4
ヨ ザ ル	7
リ ス ザ ル	3
ノ ド ジ ロ オ マ キ ザ ル	1
フ サ オ マ キ ザ ル	2
チュウベイクモザル	1
ミ ド リ ザ ル	3
パ タ ス ザ ル	2
ニ ホ ン ザ ル	283
ヤ ク ニ ホ ン ザ ル	23
ア カ ゲ ザ ル	174
タ イ ワ ン ザ ル	13
ブ タ オ ザ ル	4
ベ ニ ガ オ ザ ル	6
ボ ン ネ ッ ト ザ ル	10
カ ニ ク イ ザ ル	36
ア ッ サ ム ザ ル	5
M. ff × M f y	2
M. ff × M m	6
E p × C a	2
マ ン ト ヒ ヒ	2
ゲ ラ ダ ヒ ヒ	1
シ ロ テ テ ナ ガ ザ ル	2
ア ジ ル テ ナ ガ ザ ル	1
チ ン パ ン ジ ー	8
計	632

論 文

- 1) Matsubayashi, K. (1982): Comparison of two methods of electroejaculation in Japanese monkey (*Macaca fuscata*). Exp. Anim. 31-1, 1-6.

研究報告・その他

- 1) 松林清明・町田昌昭・和 秀雄・千葉敏郎・東 滋・大沢 済(1981): 幸島サル群の腸内寄生虫——感染状況の調査と駆除の試み, 科研費調査報告
- 2) 松林清明(1982): カニクイザルの赤痢を追う インドネシア調査報告——, モンキー 181, 28-33.
- 3) Matsubayashi, K., D. Sajuthi (1982): Microbiological and clinical examinations of cynomolgus monkeys in Indonesia. Kyoto University Overseas Report of studies on Indonesian Macaque I, 47-56.

学 会 発 表

- 1) 松林清明・望月公子(1982): ニホンザル雄性生殖器官の成長と季節的变化。第93回日本獣医学会

ニホンザル研究林

研究林実行委員会

1. 下北研究林

下北半島北西部のニホンザル生息地では、例年の通り、主として冬季の観察条件の良い時期に、群れの遊動の継続追跡観察を行った。

西南部に生息する群れに関しては、分裂後の経過を追うとともに、餌づけ群の生態管理に必要な基礎調査を行ってきた。

2. 上信越研究林

雑魚川流域の冬の糞内容分析研究が行われた。その中で、糞に含まれる繊維によって食物の樹種分類が可能になりつつある。又、横湯川流域の

seed trap による果実生産量、植生調査及び志賀C群の生態調査が、1980年に続いて行なわれた。

冬期における志賀A₂群の空間配置に関する予備調査、及び志賀A₁群の泊り場におけるグルーピングに関する予備調査が行われた。

3. 木曽研究林

56年度には、共同研究員と協力し、ひきつづき群れの遊動について追跡調査を行った。しかし主要な努力は、この地区で起こっている猿害を阻止し、サルを広大な国有林に追い戻すことに払われた。全国にわたり頻発している猿害問題の解決が、ニホンザルの保全につながるからであると同時に、この地区での研究を安心して行えるようにする必要もあるからである。

木曽研究林には56年度から国費が認められたので、研究の基地となる小舎の建設とともに、いよいよ野生群の個体識別下での長期トレースに向けて、一步をふみ出すことになる。

4. 屋久島研究林

56年度の調査活動は主として共同利用研究によってすすめられ、研究林予定地での長期集中調査が行われた。研究目的としては、自然群での社会学・生態学をおしすすめることにあるが、今年度はとくに具体的な社会関係まで調べることができた。57年度は56年度の調査の継続として、屋久島の上部に生息する群れとの生態学的差異と、垂直分布構造の中での群間関係のありかたを明らかにすることを目標としている。

研究林予定地は、国割岳西斜面の国有林2-4林班であるが、多くの群れが国有林界より下の民有林の部分にまたがった行動域を持っている。現在、国割岳西斜面と瀬切川左岸域を核とする垂直帯について、施業計画案の見直しと、国立公園への編入、保護区区分の格上げが、林野-環境両庁の間ではほぼ決定した。

大学院学生

昭和56年度における京都大学理学研究科動物学専攻霊長類分科の学生、指導教官および研究テーマは次のとおりである。

氏名	学年	指導教官	研究テーマ
丸橋珠樹	D3	河合 雅雄	ヤクザルの社会生態学的研究
川本 芳	D3	野澤 謙	遺伝的変異よりみ

氏名	学年	指導教官	研究テーマ
小島哲也	D3	室伏 靖子	た霊長類の系統に関する研究
松本 真	D3	江原 昭善	ニホンザルの個体認知行動の実験的分析
森山恭子	D3	近藤 四郎	霊長類の顎・顔面頭蓋の形態学的研究
船橋新太郎	D3	久保田 競	霊長類足骨に関する形態学的研究
藤田和生	D3	室伏 靖子	スキルネスの神経機構の研究
浜田 穰	D2	近藤 四郎	ニホンザルの概念学習に関する実験的研究
今井一郎	D2	田中 二郎	ニホンザルおよびその他のマカクの形態研究
星野次郎	D2	河合 雅雄	沖縄県西表島における狩猟、魚撈、採集
鹿野一厚	D1	田中 二郎	ニホンザルの群におけるオトナオスの役割
宮藤浩子	D1	河合 雅雄	小笠原野生化ヤギの社会生態学的研究
ジャン・バルセロ	D1	河合 雅雄	ニホンザル自然群におけるメス離脱による分裂群の形成過程に関する研究
幸田正典	M2	河合 雅雄	ニホンザルの顔の表情の研究
名取真人	M2	江原 昭善	旧世界ザル・新世界ザル25種の母子関係の比較行動的研究
三谷雅純	M1	河合 雅雄	リスザルの臼歯の個体変異について
広谷 彰	M1	河合 雅雄	日本ザルの音声のコーディネーションについて
			ニホンイノシシの動物社会学的研究